

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：14501
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K03011
 研究課題名(和文) Interactional Engagement in EFL Oral Proficiency Testing

 研究課題名(英文) Interactional Engagement in EFL Oral Proficiency Testing

 研究代表者
 T・S Greer (Timothy, Greer)

 神戸大学・大学教育推進機構・教授

 研究者番号：10320540
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：普段英語学習環境での会話テストは、広範な説明を含むルーブリックで採点されるが、別の方法では、各レベルでビデオ録画された模範的な事例を集め、細かな表現によるルーブリックを構築する。会話分析(CA)は、このような基準を作成するための適切なツールであるが、CA専門家ではない教員評価者は、テスト評価が果たして理解できるか？当研究では、ビデオ見本に基づいた会話テスト基準を利用する評価者の間の議論を分析し、評価者が学生の相互作用的な関与の理解に焦点を当てる。本調査によって、教師が学生の会話能力に対する理解を示し、当ルーブリックによっていかに根拠のある評価が促進できるかを示す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人英語学習者は、会話が苦手であると言われ、この印象になる原因の1つは、十分にインタラクション能力を評価するテストが存在しないことが考えられる。よって、当研究では、相互作用の関与(engagement)を評価する会話テストを開発・実装し、英語教員で評価基準を試行した。具体的に、エンゲージメント(会話的関与)とは、ターン交代、ポスト拡張、トピック発展などといった相互作用的な機能を指す。これらを観察可能な形にすることによって、学習者のコミュニケーション意欲が評価できた。さらに、対話型関与をテストすることにより、ウォッシュバック効果があり、学習者はこれらの機能に注意を払うことが想定される。

研究成果の概要(英文)：While paired student discussion tests in EFL contexts are often graded using rubrics with broad descriptors, an alternative approach constructs the rubric via extensive written descriptions of video-recorded exemplary cases at each performance level. Conversation Analysis (CA) is one apt tool for constructing such exemplar-based rubrics, but are non-CA specialist teacher-raters able to interpret a CA analysis in order to assess the test? This study analyzes teacher-rater discussions of EFL oral tests that use exemplar-based rubrics. The analysis focuses on ways experienced language educators perceive students' interactional engagement while discussing their ratings of the video-recorded test talk in relation to the exemplars and descriptive rubrics. The study highlights differences in the way teacher-raters display their understanding of the notion of engagement within the tests, and demonstrates how CA rubrics can facilitate a more grounded assessment.

研究分野：英語教育

キーワード：英語会話能力テスト 会話分析 English interaction test Conversation Analysis

1. 研究開始当初の背景

日本の大学で見られるような外国語としての英語学習 (EFL) の教育現場で、教師にとっての最大の課題の 1 つは、学生の対話能力 (Interactional competence=IC) を評価する方法であろう。今までに、このような評価は、教師と各学習者間の 1 対 1 のインタビューや面接で行われていた。ただし、これは、大規模なクラスでは常に行うことができるとは限らず、結果として、会話テストは、ペア又は少人数のグループで運営・実行されることがよくある。このようなテストをビデオで録画することによって、インストラクターは残りの学生に教え続けることができ、後で録画されたテストデータを詳細に見て評価ができる。教師は会話に参加しないので、学習者はトピックを開始し、会話を続け、相互作用の問題に対処する際に、より積極的な役割を果たす必要がある (Gan 他、2008)。これにより、話す機会が増えるが、学習者があまり話さなったり、限られた回答しか与えなかったりする場合もある。

EFL 現場で、学生 2 人で組んだ会話テストは、通常、何らかの形のルーブリック (理想的なケースに合わせて簡略化された広範な説明を含むもの) に従ってグレード分けされる (Talandis、2017)。ただし、別の評価方法では、各パフォーマンスレベルでビデオに記録された模範的な事例を見本にし、広範な観察に基づいてルーブリックを作成する。台本化されていない相互作用の深く記述的な観察する長い歴史を持つ Conversation Analysis (CA) (Sidnell & Stivers、2012) は、このような見本に基づいたルーブリックを構築するのに非常に適したツールである。当研究の起源は、日本の EFL 教育現場でよく見られることであった。研究者のクラスでは、英語があまり上手ではないが、相手とのコミュニケーションに高い関心を示している学習者に出くわすこともある。このような学習者は、正確さ、流暢さ、複雑さの点で言語能力が比較的低い場合でも、利用できる限られた言葉で会話に積極的に参加することができた。要するに、彼らは相互作用に非常に関与していたため、これはディスカッション評価ツールに組み込む価値のあるものであった。肯定的なウォッシュバック効果もあり、相互作用能力に関する関与の重要性を学生に検討するよう促すためでもある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、会話的な「エンゲージメント」を評価するルーブリックの開発及び実施することであった。当研究プロジェクトでは、エンゲージメントというのは「コミュニケーションへの意欲」の概念を模範的に再概念化したものと見なしており (Yashima、2002)、したがって、受験者のエンゲージメントの証拠は、関連する事後拡張などの公的に利用可能な相互作用の実践で見つけることができる。例えば段階的なトピックシフト、共同修復、第 3 ターンの取り込み (Schegloff、2007 年) といった Interactional practice によって engagement が見えてくる。この調査では、このような特定の相互作用実践を、会話評価環境内で目に見える形で利用できるエンゲージメントとして強調し、会話分析に基づいたルーブリックがどのようにして評価を促進できるかを示す。コミュニケーションする意欲を外部化することにより、参加者の視線は、相互作用を観察するテスト評価者がアクセスできるようになる。ルーブリックは、ビデオ録画の一部を利用して、受験者が interactional practice をトークに組み込み方を詳細に説明する。また、CA の専門家ではない教師評価者がこれらの見本を使用して、エンゲージメントの概念の運用と評価の両方を行える範囲についても説明する。

3. 研究の方法

3.1 会話テストの状況

上で概説したように、この研究は2つの関連データセットを利用する:(a)神戸口頭能力試験(The Kobe Test of Oral Proficiency = KTOP)として呼ばれるビデオ録画された学習者ペアの会話テストのコレクション、および(b)研究者が考案した見本に基づいたルーブリックを参照しながら、これらのテストを見て議論する教師評価者2名の間に行った rating 相談の記録(ビデオ録画1時間とその書き起こしたトランスクリプト)。KTOP データセットは、2015年6月に神戸大学でビデオ録画された EFL 口頭能力テストの広範なコーパスの一部である。受験者はすべて大学1回生の日本人学生であり、テストは英語コミュニケーション授業の3つの評価項目の1つであり、学生の総合成績の20%であった。データが収集された時点で、受験者は8週間のコースに参加し、話し合いを通じて会話の流暢さを伸ばすことに重点を置いた。彼らは、6週間にわたって授業で6つのトピック(自分、家族、旅行、結婚、シェアハウジング、仕事)について話し合い、これらはテスト中に与えられた課題でもあった。

テストの開始時に、受験者は、トピックが書かれたカードを選択することにより、これらの話題の1つをランダムに割り当てられた。その後、その課題について4分間自由に話してもらった。

4つのパフォーマンス・エリア(流暢さ、正確さ、複雑さ、エンゲージメント)のそれぞれに10点満点で、6が合格、7がB、8がA

(まれに9または10がS)をつけた。絵文字

は、教師の最初の反応を示すためのもので、通常、テストの終わりに成績が割り当てられる前に記入された。また、教師は各受験者の成績について短いコメントもいくつか記入した。ただし初期の録音では、生徒は正確さ、流暢さ、複雑さの点でのみ評価された。エンゲージメントコンストラクトは、初期データが収集された後追加されたため、見本は後で再評価され、4つの項目すべてを含む後続のテストの基礎となった。

模範的なビデオが選択されたのは、4つのレベルのそれぞれでエンゲージメントの明確な見本を示したためである。説明は詳細を意図したものであったが、CA以外の専門家もアクセスできるように構成された。多くの場合、ビデオ内の対話型エンゲージメントの主要な例を示すKTOPからの抜粋が含まれた。それらは1つのA4ページに収まるように設計されていたので、評価者はそれほど難しくなく処理できるように作った。それぞれに関連する動画が添付され、教員は後で見本に基づいて他の動画を評価する前に、CA ルーブリックと合わせて動画を視聴するよう準備した。

3.2 見本の評価

ビデオの見本が完成したら、2人のEFL教師(ここでは「ボブ」と「ジム」と呼ぶ)は、会話的な engagement の証拠を特定できるかどうかを確認するために、もう8つのペアを評価するようお願いした。評価者はどちらも英語のL1スピーカーであり、日本語学習者の教育経験が豊かであった。評価を個別に完了した後、彼らは評価を互いに議論し、評価者間の解釈学的対話の形式で意見の相違を正当化した(Walters, 2007)。

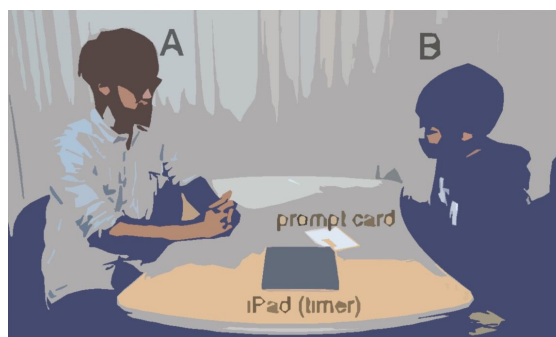


Figure 1 KTOP 会話テストの様子

したがって、各評価者は次のことを求められた。

1. 模範的なビデオを見て、各レベルのエンゲージメントに関する詳細なループリックを読む
2. 8つの未評価の動画をそれぞれ視聴し、ループリックに従って各参加者に評価を与え、テストでの engagement を評価する
3. 彼らが割り当てた評点をもう1名の評価者の評点と比較し、意見の相違点について話し合う。

評価者の議論はビデオに録画され、後でその内容は質的に分析された(Cho & Lee, 2014; Elo 他, 2014)。

4. 研究成果

4.1 はじめに

このセクションでは、調査結果を示す。評価者のコメントの質的コンテンツ分析により、解釈学的対話中に出現した6つの反復的なテーマ、すなわちシーケンスの拡張、熱意、並列性、具体化、タイミング、および真正性(セクション 4.2)を述べる。全体として、評価者のフィードバックは、CA ループリックで与えられた詳細な説明に沿ってエンゲージメントの概念を適切に解釈できたことを示しているが、ループリックを超える独自の解釈を追加することもあった。

4.2 テーマ別カテゴリー

評価者が議論に参加され、そのビデオ録画を元に文字起こされた後、データから引き出された6つのテーマに帰納的にコード化された。CA ループリック文書に対する2人の教師と評価者の理解によると、焦点はengagementとは何かの説明し、カテゴリーを抽出することであった。表1は、そのコーディングから生まれたテーマのリストである。これらのテーマは、コーディングを検証するために、2人目の研究者によって後で独立してコーディングもされた。何らかの矛盾があった場合、研究者たちは合意に達するまでその違いについて話し合った。

表 1

評価者の議論から浮上したテーマ別カテゴリー

Thematic category	Gloss
Sequence expansion	The speaker precedes, intervenes and extends on the base turn sequence
Enthusiasm	The speakers appear interested in the talk
Parallelism	The speakers are talking about different topics and there is limited coherence between turns
Embodiment	The interactants use gestures, gaze and so on to display their engagement
Timing	Over-attention to the timer distracts from the interactants' engagement
Authenticity	The interaction appears "genuine"

これらの議論から2つの二次的で予期しない点も生じた:(1) 評価者がループリックを誤用し

ているように見えることによって、ルーブリックで予想外な成績をつけた場合、および(2) 評価者がルーブリックの妥当性を疑問にした場合。これらについては、次の「研究成果」で詳しく説明する。

4.3 Misinterpreting the rubric

4.2 に示されているように、評価者の解釈学的対話は、見本に基づくルーブリックからエンゲージメントの概念が理解でき、EFL 会話テストの他のビデオサンプルでその事例を特定できることを示唆する多くの証拠を提供しました。この意味で、ルーブリックは効果的だったと言える。しかし、ある時点で、(少なくとも研究者によって意図された)ルーブリック内で定式化された形で、評価者の 1 人が関与の概念を誤って解釈したように見える。この誤解は、テスト内のトピックのシフトに関連していた。ルーブリック説明が触れたものではなかったが、ジムは、トピックの一部に示されているように、トピックカードに最初に書かれたものからトピックを移動した受験者は、エンゲージメントの点で罰せられるべきだと何度か感じた。ルーブリックの開発者の意見では、会話内のトピックシフトは、段階的に発生する限り、問題にはならない(Jefferson, 1993)。実際、最初のトピックから離れることは、自然な方法で行われている限り、より深い関与の証拠と見なされることもある。それは、話者の反応から自然に進化したためである。上記の最後のポイントに応じてボブがジムに言ったように、「ええ、彼らが話題から外れることを心配していませんでした。今、彼らが興味を持って話そうとする様子の方が大事だと思います。」

したがって、この問題に関して言えば、テストの目的は、ジムの立場よりもボブの立場に沿ったものである。ある時点でルーブリックはトピックの移行について具体的に言及している。D レベルでは、「Aはこの機会を利用して、準備されたモノログからより自然な前後の会話に話を移行しない」とある。ただし、これは、トピックの変化が相互作用の正常かつ予期された部分であり、したがってこのテストで許容可能であることを意味する。ジムがここでルーブリックを誤解しているのは、彼がテストパラメーターに精通していないことが原因であった可能性があるが、それを engagement に関連付けたのは不思議である。別の説明として、ジムは、対話者や緊急のやり取りではなく、割り当てられたトピックに取り組むという観点からエンゲージメントを解釈したと考えられる。これは、将来さらに明確にする必要があるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tim Greer	4. 巻 24
2. 論文標題 Recalibration repair in bilingual interaction: Other-language forms as precision	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism	6. 最初と最後の頁 forthcoming
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tim Greer	4. 巻 16
2. 論文標題 Using a conversation analytic exemplar-based rubric to assess engagement.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of School of Languages and Communication, Kobe University	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Erica Sandlund & Tim Greer	4. 巻 未定
2. 論文標題 How to raters understand rubrics for assessing L2 interactional competence? A comparative study of CA- and non-CA-formulated performance descriptors	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Paper in Language Testing and Assessment	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件/うち国際学会 10件）

1. 発表者名 Erica Sundland, Tim Greer
2. 発表標題 Rater understandings of rubrics for assessing L2 interactional competence: A comparative study of study of CA- and non-CA-formulated performance descriptors
3. 学会等名 American Association of Applied Linguistics（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Assessing engagement in EFL oral tests
3. 学会等名 JALT International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Closing up testing: Orientation to a timer during a paired EFL oral proficiency test
3. 学会等名 5th International Conference of Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Operationalizing engagement: Evidence from test rater's deliberations
3. 学会等名 2nd Interactional Competences and Practices in a Second Language (ICOP-L2) conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Aligning, disaligning and misaligning with a telling
3. 学会等名 Australasian Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Multiple involvements in test closings
3. 学会等名 Japan Association for Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Closing up testing: Orientation to a timer during a paired EFL oral proficiency test.
3. 学会等名 International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Sequentiality, Contingency and responsiveness: A conversation analytic take on student engagement in EFL discussion test contexts
3. 学会等名 ALAA conference, Curtin University, Perth, Australia, 25-27 November. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tim Greer
2. 発表標題 Using a conversation analytic exemplar-based rubric to assess engagement in a paired EFL test.
3. 学会等名 7th British Council New Directions in English Language Assessment (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tim Greer & Zack Nanbu
2. 発表標題 Embodying gradations of knowledge in novice EFL conversation
3. 学会等名 2nd ICOP-L2 conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Tim Greer	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Multilingual Matters	5. 総ページ数 328
3. 書名 Conversation Analytic Perspectives on English Language Learning in Global Contexts	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	エリカ サンドルンド (Erica Sandlund)	カールスタード大学・英語言語学学部・准教授	https://www.kau.se/en/researchers/erica-sandlund